Management Club Report

Aug.2014/Vol.140

Monthly Opinion ≪歯科医院経営の潮目を読む≫

競合が激しさを増し始めた20世紀の終盤、歯科医院は技術革新とともに経営手法の変革が、生き残りに向けて大きなカギを握ると言われるようになりました。今でも「歯科医師は大学できちんとした経営学を学んでこなかったことが経営者としてのウイークポイントとなっている」と指摘されることがありますが、それは必ずしも正しくありません。なぜなら経済学部や商学部を卒業した一般企業人にしたところで、学生時代に経営能力を身に付けるほど経営学の勉強に没頭したと胸を張って言える人間はそうはいないわけで、つまり大同小異、大学のカリキュラムの問題ではないのです。

もし歯科医師と一般企業人との間に経営的視点において差が付くとすれば、それは大学での勉強というよりも、卒業した後、企業という組織に属することで、ビジネスの進め方や人間関係の調整の仕方、リーダーシップなど、経営の実学を見よう見まねで学びながら成長して行くことができるかどうかという、体験の違いによるものだと思います。

歯科医師はそのような体験がなく、就職すると同時に管理職となり、院長からも『先生』と呼ばれる立場で臨床経験だけが豊かになって開業をする。すなわち、いきなり経営者となって直面する世俗の諸問題に頭を痛めることになるのですが、その対策として応急処置的に取り入れられてきたのがビジネス書や経営セミナーで得たノウハウでした。それらは一定の成果となって現れたものの抜本的な問題解決には至らないことを理解する歯科医院経営者がここ数年来多くなってきたことを感じています。

今月は、暗中模索状態の中で光を見出すためにはどのような方向感をもって臨むべきか、グローバル社会の中で起きつつある価値観の変化と、労働環境の変化。この2つの『変化』をどのように取り込んでいくべきか、変わろうとする歯科医院経営の潮目について私なりの見方を述べることにしました。

1 今、静かに起こりつつある確かな変化

星野リゾートの読みと挑戦

『星野佳路“世界の大都市に最低1軒の日本旅館を”』

些か旧聞に属しますが、月刊誌WEDGEの2014年5月号にこんな見出しが